

あさに
朝仁アマンギョ (天川) 遺跡
(鹿児島県名瀬市大字朝仁字天川)

位置と環境

朝仁アマンギョ (天川) 遺跡は、奄美大島名瀬市の朝仁集落字天川に所在している。東シナ海に面している朝仁集落は、北西側に開かれた狭い谷間の海岸部分に集落が位置している。海岸線は砂丘地が良く発達しており、集落も砂丘部分に営まれている。都市計画事業が実施されており、宅地化が著しく進んでいる。旧集落は、海岸西側の砂丘部分に所在し、後方の山裾部分に遺跡が位置している。

調査の経緯

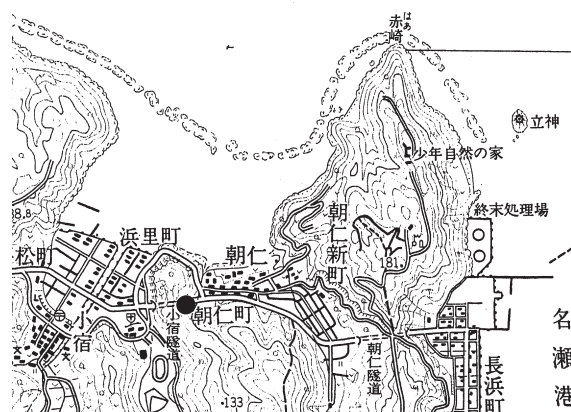
県道佐大熊小宿線改良工事に伴うトンネル計画地 (朝仁集落側) から、里山勇廣が遺物 (土器) を採集して名瀬市教育委員会に届け出たことから、緊急発掘調査が実施されたものである。名瀬市教育委員会が調査主体となり、鹿児島県教育委員会の協力を得て、昭和58 (1984) 年7月4日～7月29日に本調査を実施した。

遺構と遺物

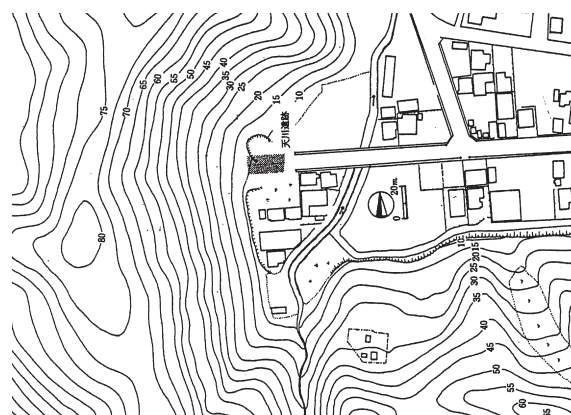
縄文時代後期～晩期に相当する遺物は、土器と石器等が出土している。土器は、縄文時代後期相当のものには、面縄東洞式土器、嘉徳 I A 式土器、嘉徳 I B 式土器、嘉徳 I 式土器が、縄文時代晩期相当のものは、面縄西洞式土器、嘉念式土器、宇宿上層式土器等が認められる。中でも嘉徳 I B 式土器、嘉徳 II 式土器、面縄西洞式土器、宇宿上層式土器が多数出土している。ただし、ほとんどが小片で全形が復元できる資料は含まれていない。石器は、打製石斧、磨製石斧、磨石、叩石、石皿、石核等が出土しているが、ほとんどが磨石である。遺構は確認されていない。

特徴

当該遺跡は、名瀬市内における縄文時代相当期の発掘調査事例としては唯一の資料である。山裾部分の傾斜地に位置しており、遺跡を包含している土層中には多量の角礫が含まれており、加えて時期が相違する土器の混在が認められる点から、二次堆積による遺物包含層と位置づけられている。本来の遺跡



第1図 朝仁アマンギョ (天川) 遺跡の位置



第2図 発掘調査箇所

は、山地部分のどこかに所在していると考えられる。当該遺跡南側に隣接する山地中腹に旧浄水場があるが、建設工事の際に出土遺物が確認されている。当該遺跡と関連が考えられる。

資料の所在

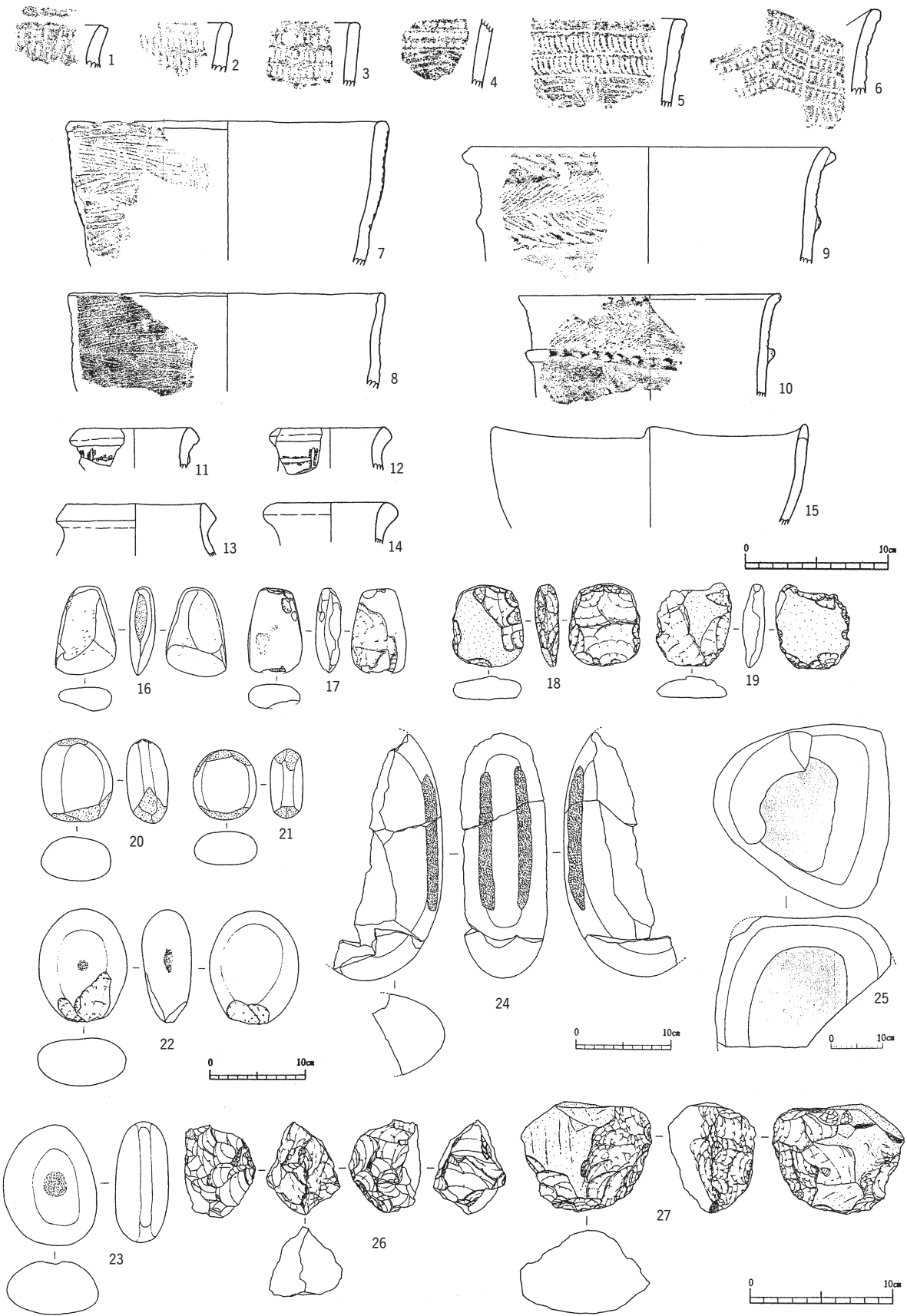
出土遺物は、名瀬市教育委員会の名瀬市立奄美博物館に保管されている。

参考文献

名瀬市教育委員会1984「朝仁天川遺跡」『名瀬市埋蔵文化財発掘調査報告書』1

名瀬市教育委員会2001「奄美大島名瀬市グスク詳細分布調査報告書」『名瀬市文化財叢書』3

(高梨 修)



第3図 出土遺物